



British Politics Today

2013年6月1日
第2巻 第6号

著者 菊川智文,

www.Kikugawa.co.uk
tomo@kikugawa.co.uk

この号の内容

- 1 はじめに
- 2 言動に注意を払う英国の政治家
- 3 公務員の能力とリーダーシップ
- 4 エミリー・デイブソン
- 5 デジタル・ガバメント

1. はじめに

今春は 30 年ぶりの寒さであったそうですが、やっと温かくなってきました。庭のウイステリア(日本名フジ)とビューティ・ブッシュ(日本名ショウジョウウツギ)がきれいに咲いています。

キャメロン首相の保守党内での基盤が弱まっており、党内にキャメロン首相の失敗を願う声も出てきました。キャメロン首相は今秋まで山場が続きます。

2. 言動に注意を払う英国の政治家

橋下大阪市長の問題発言で、共同代表を務める日本維新の会の支持率が低下している。橋下市長は、思いつきの不用意な発言で大きなダメージを負ったようだ

労働党のエド・ミリバンド党首は 2015 年の次期総選挙後に首相となる最右翼であるが、言動に非常に神経を使っている。うかつに発言することを避け、自分の立場を分析し、発言の効果を量り、決めた線に沿って発言する。これは多くの政治家も同じで、かつてゴードン・ブラウン元首相は、何を聞いても同じ答えが返ってくると言われた。

もちろん慎重な発言にはマイナスの点もある。ミリバンドに焦点を絞った世論調査(タイムズ紙 5 月 30 日)にそれがはっきりと出ている。英国では、総選挙の行方には党首のイメージが非常に重要なものと受けとめられており、いわゆる「リーダー評価」を世論調査会社がよく実施している。この調査では、ミリバンド党首の前に 2010 年 5 月まで党首を務めたゴードン・ブラウン前首相との比較が中心である。

ブラウンの方が一般の人のことを考えているとか、決断力がある、仕事ができる、もしくは目的がはっきりしているなどの点で評価した人が多い。一方、ミリバンドはまだよく知られていない上に、ミリバンドに強い印象を持つ人が少ないようだ。それでもミリバンドがブラウンより良いという人は 32%、ブラウンの方がよいと答えた人は 17%であり、ミリバンドの方が党首としてより良い印象のあることがわかる。

ミリバンドはこれまで意識的に難しい決断を迫られる問題を避けてきた。キャメロン首相の広報局長を 2 年前まで務めたアンディ・クールソンが指摘したように、ミリバンドは「頭を低くして問題を避けて」きた。これから 2 年足らず先に行われる総選挙までには、マニフェストに入れる政策を巡って、ある程度の決断を迫られることになるだろう。それでも恐らくミリバンドは、かつてトニー・ブレアが 1997 年の最初の総選挙勝利の前に行ったように、政策として形は成しているが、突っ込まれない程度にあいまいなものを多く並べるということになるだろうけれども。

世論調査で労働党が保守党を上回っており、保守党が英国独立党(UKIP)の影響で苦しむ中、次期総選挙では労働党はかなり有利な状況である。そのため、敢えて危険なことをする必要がないということがミリバンドの態度の背景にある。しかし、例え労働党が世論調査で保守党の後塵を拝しており、一発逆転の勝負に打って出る必要があっても、それは世論調査の結果も踏まえた、計算された勝負となる。思いつきのようなものではない。

参照

Ipsos-Mori の歴史的な首相・党首調査は以下参照

<http://www.ipsos-mori.com/researchpublications/researcharchive/poll.aspx?oltemID=88&view=wide>

3. 公務員の能力とリーダーシップ

移民問題に対応するために、政府が大家にテナントの在留資格を確認させる制度を発表した。5月初めの女王のスピーチでの移民対策の一環である。ところが、この政策は実施が難しいことがわかった。

この政策は、コミュニティ・地方自治省の管轄であるが、その大臣がキャメロン首相に、全国的(管轄はイングランド)に実施することは難しく、移民問題の深刻な地域のみで実施したいと報告すると、キャメロン首相が顔色を変えて怒ったと伝えられる。

当然だろう。そのようなことが発表前にわかっていないこと自体、大きな問題だ。政権の政策のUターンで大きな批判を受けた経緯があり、しかもEU国民投票の問題や同性結婚の問題で保守党内の反乱が相次ぎ、キャメロンの立場が弱くなっている時にさらなる政策の失敗が強調されるような事態は避けたいと考えるのは当然である。

もちろんこの移民対策は、英国独立党(UKIP)がEUから脱退すれば、EU内の無制限の移民をストップできると訴えていることに関連している。つまり、UKIP対策が念頭にあり、状況からしてかなり緊急性があると判断されたものであった。しかし、このような基礎的な問題を公務員が指摘できなかったのはなぜか？

大家がチェックせずに在留資格のない人がテナントとして入居していた場合、大家に罰金が科される。しかし、この制度を徹底させるための大家の登録制度はない。在留資格はパスポートで確認するという方法がとられると想定されるが、英国人でもパスポートを持っていない人もかなりいる。しかもEU内ではパスポートなしでいわゆるIDと呼ばれる身分証明書で英国に入国してきた人も多い。偽IDもかなり出回っている。英国ではIDカードは、キャメロン連立政権で導入しないことを決定した。

英国では、特定のグループを対象に身分証明書のチェックをすることは違法の可能性があるのである。そのため、こういう在留資格のチェックは、テナント全員に対して行う必要があると思われる。しかも何らかの在留資格を証明する書類があっても、それが本物かどうかは一般人では見分けは困難だ。つまり、それぞれの書類が本物かどうかを確認するためには、内務省の国籍局に問い合わせる必要があるのではないかと見られている。つまり、これらの手続き問題を十分に検討することなく、女王のスピーチに入れてしまったことに問題がある。

日本では、こういうことが起きるとは考えにくい。稟議制で関係者にその内容が周知され、問題はその過程で浮き彫りにされるはずである。しかし、この稟議システムには、責任の所在があいまいになり、また、リーダーシップが育ちにくいという問題がある。行政の焦点やその役割が変化する時代を迎え、その有用性そのものを再検討する必要があるだろう。しかも新しい時代に対応するためのリーダーシップが求められている時代に、まさにそのリーダーシップそのものが提供できない可能性がある。

英国式のシステムは、早い決定を許すが、十分に吟味されないまま政策が出される可能性がある。これには、公務員の能力そのものへの疑問、つまり、公務員に政策分析、判断能力が欠けている人たちが多くいることが関連している。そこで、フランス式の「青いペーパー」と呼ばれる、政策指示書を担当公務員に与え、実施のタイムテーブルを明確にし、その担当者を明確にする制度を試み始めた。責任者を明確にし、その責任者の能力の向上・検証・淘汰も可能な仕組みだ。

日本の場合も大きく変化する行政環境の中で、リーダーシップを発揮できる人を出せる体制を作っていくことが大きな課題と言えるように思われる。

庭のウイステリア (日本名フジ)



4. エミリー・デイビソン

女性参政権の闘士、エミリー・デイビソン（1872年10月11日－1913年6月8日）が亡くなってからちょうど100年になる。デイビソンは、亡くなる4日前に、ロンドンからほど近いエプソムのダービーの競馬で、レースコースに入り、国王ジョージ5世の持ち馬アンマーに蹴飛ばされ近くの病院に運ばれた。そこで意識を取り戻すことはなかった。

その葬儀では、数千人が葬列に参加し、数万人が沿道で見送ったと言われる。その墓石には「言葉ではなく行動（Deeds not Words）」と記されている。

デイビソンは、オックスフォード大学で学んだ後、教師をしていたが、1906年にエメリン・パンクハーストラが女性参政権を求めて1903年に設立した婦人社会政治連合（WSPU）に加入した。過激な活動家で、投石や放火の罪で9回投獄された。何度もハンガー・ストライキを行い、49回も強制的にものを食べさせられたという。

さて、デイビソンがエプソムで、なぜ、そのような行為に出たかには、今でも論争がある。国王の馬に蹴られて「殉教者」となることを目的としていたという見方がある一方、単に国王の馬に女性参政権運動のタスキを掛けようとしたのだ、もしくはたまたまレースコースに出て、巻き込まれたという見方もある。

(次ページへ)

キャメロン首相の訪れたインド料理店の「首相スペシャル」



雑記

キャメロン首相の訪れたインド料理店

昨年秋、バーミンガムで保守党の党大会があった際に、キャメロン首相とその妻サマンサが、首相の46歳の誕生日を祝うためにバーミンガムのインド料理店を訪れた。バーミンガムには多くのインド料理店があり、バルチと呼ばれるカレーはここで生まれたとも言われる。

キャメロン夫妻が訪れたインド料理店は、ディワンという店で、ここは、英国のインド料理店にかなり多い‘Bring Your Own’である。これは略してBYOといわれるが、アルコール飲料は客が持参する。つまり、自分の好きなアルコールの飲み物を持参して店に行くわけである。キャメロン首相はビールを持ち込んだ。

キャメロン首相が注文したのは、Chicken Bhuna(鶏肉のカレー)と Saag Paneer(チーズとホウレンソウのスパイス)、ピラフとナンブレッドであった。これは、現在も「首相スペシャル」として14.95ポンド(2,300円)で提供されている(右上写真参照)

この日、キャメロン首相がカレーを食べに行くこと示唆したため、ある賭け屋はキャメロン首相が何を食べるかの賭けを提供した。Roghan Josh 9/2、Tikka Masala, Madras, Bhunaのいずれもが5/1であった。

実は、この店には何度も行ったことがある。懐かしい。知り合いがこの店に食事に行くというのでメニューの写真を撮ってもらった。

4. デイビソン(続き)

まず、デイビソンがロンドンからの往復乗車券を持っていたこと、その晩の女性参政権運動のダンスのチケットを持っていたことや、その数日後にフランスの姉のところに行くことになっていたということから見ると、あらかじめ「殉教者」となる意思はなかったようだ。

ダービーには、伝統的に国王が持ち馬を走らせることになっていた。そのためデイビソンがあらかじめ馬にタスキを掛ける練習をしていたという報告もある。

また、当時、ダービーで馬が走りすぎた後、観客がレースコースに出てゴールに向かう習慣があったことから、それで事故に遭ったという見方もある。

いずれにしても、女性参政権の実現に情熱を傾けた女性がちょうど100年前に亡くなり、今でもその行動に価値があったと多くの人を感じている。そのため、各地でデイビソンを偲ぶ催しが行われた。なお、英国で女性参政権が男性と同じになるのは1928年のことである。日本では1945年であった。

この女性の命を賭けた努力が今の政治の世界で実っているかどうか？

ニューズレターの4月号でも取り上げたが、英国では、下院議員650名中女性は146人で22%、日本では480人中38人で8%である。



庭のビューティ・ブッシュ（日本名ショウジョウウツギ）

5. デジタル・ガバメント

どうすれば政府の仕事を効率よく早くでき、しかも政府が小さくなるか？財政削減で苦しんでいる政府は、政府のサービスをできるだけオンラインでできるようにしようと躍起になっている。

21世紀に即した行政に脱皮するために、キャメロン政権では、「標準設定がデジタル(Digital by default)」というスローガンのもとに基本的に行政の業務をすべてオンラインで行えるようにしようとしている。2015年までに達成することが目標だ。

英国でも約2割の人は、インターネットにつながっていないか、ほとんど使わない人たちである。そういう人たちのことも考慮しながらも、行政事務をオンラインで行えるようにすることは、行政の経費を下げるためにも極めて有効である。つまり、使用者のニーズにあった、簡単に早く、費用効率の高い、オンラインサービスを実施しようとしている。

その努力の一つの成果として、政府のウェブサイトGov.ukは英国の年間最優秀デザイン賞を受賞した。

この一環に政府の公開政策がある。データの公開、政策作りの公開、そして政府の公開である。政策の外注やクラウドソーシング的な考え方を入れている。

モウド内閣府担当相はデータの公開について語る。

データは21世紀の新しい原材料である。政府の責任を問い、公共サービスを向上させ、経済を成長させ、そして市民参加や市民への権限委譲も生む。

これらは、確かに望ましい方向だろう。ただし、英国でもデータの公開がどの程度進むかという問題がある。政府には、データを出すのを嫌がる傾向がある。また、完全に検証されたデータだけを公開しようとするあまり進まない可能性がある。一方、生データを公開されても、わかるような形で加工されていなければ、理解が難しいという点もある。プライバシーの問題など、今後の課題はかなり大きい。

なお、これらはアメリカや日本でよく言われる gov 2.0 と似通った点があるが、英国では gov 2.0 という言葉はあまり使われていない。

引用、転載には引用先、著者名を明記して下さい。

コメント・配信お申し込み：tomo@kikugawa.co.uk